洗足学園音楽大学ファンファーレオルケスト
第31回定期演奏会

2021年 11月 23日（金） 18:00 開演
（17:30 開場）

洗足学園　前田ホール

主催：洗足学園音楽大学・大学院

⚠新型コロナウィルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。

・大声や対面での会話はお控えください。

・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。

・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。

・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。

・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。

・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

Program　—プログラム—

Giuseppe Verdi(Arr. Piet Stalmeier) : Overture “La Forza Del Destino”

G.ヴェルディ(ピート・シュタルマイアー 編曲)：歌劇「運命の力」序曲

Giacomo Puccini(Arr. Willy Hautvast): Puccini in Concert

G.プッチーニ(ウィリー・ハウバスト 編曲)：プッチーニ・イン・コンサート

Pietro Mascagni(Arr. Cor Mellema) : Selection from the opera “Cavalleria Rusticana”

P.マスカーニ (コル・メレマ 編曲)：「カヴァレリア・ルスティカーナ」よりセレクション

—休憩—

Johann Strauss(Arr. Cor Mellema) : Overture “Die Fledermaus”

J.シュトラウス(コル・メレマ 編曲)：喜歌劇「こうもり」序曲

Franz Lehar (Arr. Naoya Takizawa): Vilja Lied from the operetta “Die Lustige Witwe”

F.レハール(滝澤尚哉 編曲)：喜歌劇「メリー・ウィドウ」より　ヴィリアの歌

Jacques Offenbach(Arr. Ph Jordaans) : Menuet et Barcarolle “Les Contes d’Hoffmann”

J.オッフェンバック(フィリップ・ジョルダン 編曲)：「ホフマン物語」より　メヌエット・舟歌

Richard Wagner(Arr. Naoya Takizawa) : Elsa’s Procession to the Cathedral from “Lohengrin”

R.ワーグナー(滝澤尚哉 編曲)：歌劇「ローエングリン」よりエルザの大聖堂への入場

Giuseppe Verdi(Arr. Piet Stalmeier) : Triumphal March From “Aida”

G.ヴェルディ(ピート・シュタルマイアー 編曲)：歌劇「アイーダ」より凱旋行進曲

Program Notes　―曲目解説―

歌劇「運命の力」序曲（G.ヴェルディ／ピート・シュタルマイアー 編曲）

Giuseppe Verdi（Arr. Piet Stalmeier）: Overture “La Forza Del Destino”

この曲は、ジュゼッペ・ヴェルディが作曲した全4幕からなるオペラである。1861年、当時のロシアの首都サンクトペテルブルグのマリインスキー劇場から、新作オペラ作曲の打診がもたらされ作曲された。
侯爵の娘レオノーラとインカ帝国の王女の息子アルヴァーロは恋に落ちた。しかしレオノーラの父に交際を反対され駆け落ちを画策するが、銃の暴発により殺害してしまい、2人は過酷な運命を呪いながら別々に逃亡する。レオノーラはこの世に絶望し修道院に入り、アルヴァーロは身分を隠して戦争へ向かう。
一方、レオノーラの兄・カルロは、父の復讐のために2人の行方を探していた。やがて戦地でアルヴァーロと知り合い、2人は決闘をしようとするが、巡邏兵に見つかり引き離される。
5年後、カルロは修道院にいたアルヴァーロに再び決闘を申し込む。決闘の末、カルロは瀕死になるが、兄を探しに来たレオノーラを殺害する。その惨状を目の当たりにしたアルヴァーロは人類を呪って投身自殺をして、幕を閉じる。
この序曲は、よく知られたメロディーと有名な三つの音によるテーマを持ち、ヴェルディの序曲の中でも最もよく構成されたものの一つである。冒頭、トランペットの不吉な警告音から第1主題が始まるが、これはアルヴァーロには伴わないことから「レオノーラのモティーフ」であると考えられている。第2主題は第2幕の「聖母への祈り」から取られたもので、変ロ短調の高貴な旋律である。それに対比する穏やかで牧歌的な旋律の、3つの主要主題の素材が見事なクライマックスへと結実する。

サクソフォン専攻2年　下藤香花

プッチーニ・イン・コンサート（G.プッチーニ／ウィリー・ハウバスト 編曲）

Puccini in Concert（Giacomo Puccini／Arr. Willy Hautvast）

この曲は、「ある晴れた日に」（蝶々夫人）、「星はひかりぬ」（トスカ）、「私のお父さん」（ジャンニ・スキッキ）、「誰も寝てはならぬ」（トゥーランドット）の4曲を繋げたメドレーであり、プッチーニの親しみやすいメロディーを、存分に堪能できる一曲である。
「マリア・カラス」や、「ルチアーノ・パヴァロッティ」で有名なオペラ・アリアの響きを、ファンファーレオルケストで壮大に歌い上げる。

テューバ専攻4年　岡田侑也

「カヴァレリア・ルスティカーナ」よりセレクション（P.マスカーニ／コル・メレマ 編曲）

Selection from the opera “Cavalleria Rusticana”（Pietro Mascagni／Arr. Cor Mellema）

「カヴァレリア・ルスティカーナ」は、イタリアの小説家、ジョヴァンニ・ヴェルガの書いた小説を元に、ピエトロ・マスカーニが1889年、26歳の時に書き上げたオペラである。
タイトルにある「カヴァレリア・ルスティカーナ」とは、「田舎の騎士道」と言った意味であり、19世紀末のイタリアで起きたヴェリズモ・オペラの代表作とも言える作品である。
オペラでの主要人物は徴兵に伴い離れ離れになったカップル、トゥリッドゥとローラ、そしてローラの夫アルフィオ。
徴兵からトゥリッドゥが帰ってきたときにはローラはアルフィオと結婚しており、それを見たトゥリッドゥも、他の女性と関係を持つ。
しかし、ローラに誘惑されたトゥリッドゥは再び関係を持ってしまいそこから復讐劇が始まる。
オペラや吹奏楽では感じることの出来ない響きをこの楽曲で感じていただきたい。

トロンボーン専攻3年　永吉彩花

喜歌劇「こうもり」序曲（J.シュトラウス／コル・メレマ 編曲）

Overture “Die Fledermaus”（Johann Strauss／Arr. Cor Mellema）

「こうもり」は、ヨハン・シュトラウス2世(1825～1899)が1874年に作曲した全3幕のオペレッタである。当時アン・デア・ウィーン劇場の支配人であったマックス・シュタイナーの依頼により作曲し、渡された台本に魅了され6週間で完成に至ったとされている。オペレッタとはコメディ要素を含んだオペラであり、他にオッフェンバックの「天国と地獄」やレハールの「メリーウィドウ」などがある。

昔、主人公アイゼンシュタインにこうもりの仮装をしたまま泥酔状態で置いていかれたことで、「こうもり博士」と呼ばれるようになってしまったファルケ博士が綿密な計画をたて復讐をする様子がコミカルに描かれている。

本日は「こうもり」より序曲を演奏する。これから始まる物語への期待感、高揚感を感じる前奏のあと、本編中に使われているメロディーなどもネタバレ的に登場し、シュトラウスの遊び心が出る一面もある。まさに名作オペレッタであると印象づける序曲である。

サクソフォン専攻2年　山崎遼介

喜歌劇「メリー・ウィドウ」より　ヴィリアの歌（F.レハール／滝澤尚哉 編曲）

Vilja Lied from the operetta “Die Lustige Witwe”（Franz Lehar ／Arr. Naoya Takizawa）

この曲は全3幕からなるフランツ・レハール作曲の喜歌劇「メリー・ウィドウ」の第2幕で歌われる。
「メリー・ウィドウ」は、パリにあるポンテヴェドロ公使館を舞台として、多くの富を相続した若く美しい未亡人ハンナ・グラヴァリをめぐる話である。
彼女の財産はポンテヴェドロ国の大部分を占めているため、公使館ではハンナが国外の男と再婚して国のお金が流出することを心配している。ハンナを国内の男と再婚させるため、ツェータ男爵は身分の違いから別れたハンナの元恋人であるダニロとハンナを結婚させようとするが、ハンナとダニロは両思いであるのにお互い素直になれずにいた。お互い何度も揉めるが、最後にふたりはめでたく結ばれ、物語が終わる。
「ヴィリアの歌」は、森の妖精ヴィリアに恋をした若い狩人が恋心を歌う曲である。ハンナはヴィリアと自分を重ね合わせる。第2幕の冒頭において、自邸で催したポンテヴェドロ風の宴会で客をもてなすために祖国を思ってこの曲を歌う。

トランペット専攻3年　渡辺寛子

「ホフマン物語」より　メヌエット・舟歌（J.オッフェンバック／フィリップ・ジョルダン 編曲）

Menuet et Barcarolle “Les Contes d’Hoffmann”（Jacques Offenbach／Arr. Ph Jordaans）

この曲の作曲者であるジャック・オッフェンバックは、ドイツ生まれでフランスで活躍した作曲家、チェリストである。オッフェンバックは父親の出身地（ドイツ・フランクフルト近郊のオッフェンバッハ・アム・マイン）からとったペンネームで、本名はヤーコプ・レヴィ・エーベルスト。オペレッタの原型を作ったといわれ、音楽と喜劇との融合を果たした作曲家である。
「舟歌」はオッフェンバックの遺作のオペラ「ホフマン物語」の中で歌われる二重唱であり、「ホフマンの舟歌（バルカローレ）」と通称される。
ホフマンの舟歌はソプラノとメゾソプラノのデュエットであり、これまでに書かれた最も有名な舟歌とされ、世界で最も人気のあるメロディーの一つである。ただし、メロディー自体は、今日では滅多に上演されないオッフェンバック唯一のドイツ語オペレッタ「ラインの妖精」からの転用である。
オペラ「ホフマン物語」はロマン派の詩人E.T.A.ホフマンの小説から3つの物語を用いて脚色したジュール・バルビエ（フランス語版）とミシェル・カレ（フランス語版）の同名の戯曲に基づいて、ジュール・バルビエが台本を書き、1881年2月10日にパリのオペラ＝コミック座で初演された。主人公の詩人ホフマンは歌う人形のオランピア、瀕死の歌姫アントニア、ヴェネツィアの娼婦ジュリエッタと次々に恋に落ちるが何れも破綻するという内容。未完のまま作曲家が死去したこともあって数多くの版があり、謎の多い作品とされている。この舟歌は第4幕第1場で歌われる。

打楽器専攻3年　加藤海夏太

歌劇「ローエングリン」よりエルザの大聖堂への入場（R.ワーグナー／滝澤尚哉 編曲）

Elsa's Procession to the Cathedral from "Lohengrin"（Richard Wagner／Arr. Naoya Takizawa）

この曲はリヒャルト・ワーグナー(1813~1883)によって作曲されたオペラ「ローエングリン」の第2幕第4場に演奏される「エルザの大聖堂への入場」の編曲である。
ローエングリンとの婚礼のため礼拝堂に向かうエルザの行列が進んでいく場面で演奏される曲なのだが、ローエングリンの中でも特に有名な場面であり、オーケストラだけでなく吹奏楽で聴いた事がある人もいるのではないか。
公女であるエルザの結婚式ということで、全体的にどこか格式高く、神秘的かつ荘厳な雰囲気を纏ったまま流れるように旋律を奏でていく。
静かに進行されていく中、次第に盛り上がりを見せ、終盤に差し掛かった場面で初めの旋律が再び現れ各楽器がその音を積み重ねていき豪華なクライマックスへと向かう。
原曲では終盤にオルトルートという魔法使いが結婚式を妨害するため悲しい雰囲気で曲が続いていくが、演奏会用に抜き出されたこの曲は明るいまま終わりを迎える。
貴族の結婚式という格式高い場の雰囲気を味わうためにも、華やかなサウンドだけではなく静寂も意識して聴いてみるとこの曲の見方が少し変わるかもしれない。

ホルン専攻4年　後藤 陸歩

歌劇「アイーダ」より凱旋行進曲（G.ヴェルディ／ピート・シュタルマイアー 編曲）

Triumphal March From "Aida"（Giuseppe Verdi／Arr. Piet Stalmeier）

歌劇「アイーダ」はイタリア・オペラ界の巨匠、ジュゼッペ・ヴェルディ(1813～1901)がスエズ運河の開通を記念して新設されたエジプトのカイロ歌劇場からの依頼により創作した全4幕から成るオペラである。
ファラオ時代のエジプトを舞台に戦いと悲恋が描かれる物語で、劇中の第2幕第2場、アイーダトランペットによる勇壮な旋律でおなじみの「凱旋行進曲」はエチオピア軍との戦いに打ち勝ったエジプト軍の将軍、ラダメスたちが凱旋するシーンで演奏される。
実際のオペラの中ではアイーダトランペットが舞台上のそれぞれ離れた位置で演奏され、合唱とバレエが加えられた絢爛豪華なな演出がなされるのが見どころである。
貧しい家に生まれて苦労して作曲家となったヴェルディがこれまで手がけてきた歌劇の中で、自己克己を積み重ねながら成長を続けた結果、音楽とドラマの融合を最もイタリア的に達成した傑作がこの「アイーダ」であるといえるかもしれない。

ちなみに今年2021年はジュゼッペ・ヴェルディの没後120年のメモリアル・イヤーであり、「アイーダ」の初演（1871年）から150年目とも重なる大きな節目の年ということで、全国各地で様々なオーケストラがこの楽曲を取り上げたが、我々洗足のファンファーレオルケストは独自の柔らかい、かつダイナミックでパワフルなサウンドを追求し、オーケストラ版とはまた違った楽曲の魅力を本日は賛歌と舞曲も加えてお届けする。

トランペット専攻2年　神山 柾紀

Performer&Profile —出演者&プロフィール—

近藤 久敦（指揮）

1955年東京生まれ。東京音楽大学付属高校、東京芸術大学器楽科(ホルン専攻)を経て、西ドイツ政府給費留学生としてベルリン芸術大学へ 2年間留学。

ホルンを故 薗 清隆、千葉 馨、安原正幸、F.ブラーデル、G.ザイフェルトの諸氏に師事。指揮を堤 俊作氏に師事。1974年、第43回音楽コンクール管楽器部門(ホルン)に19歳で入選。1976年東京芸術大学卒業生代表として、皇居・桃華楽堂に於ける御前演奏会に出演。また、川口市在住の音楽家として演奏活動の功績を認められ、1995年度川口市芸術奨励賞音楽賞を受賞。1991年から1997年3月まで東京コンセルヴァトワール尚美（現東京ミュージック&メディアアーツ尚美)において専任講師として教鞭を執った。2012年全日本吹奏楽連盟より長年指揮者賞受賞。

現在は指揮者として多くのオーケストラや吹奏楽団、オペラ、バレエ、ホルンアンサンブル「つの笛集団」等で精力的に指揮活動を展開し、レコーディング、吹奏楽クリニック、編曲等を含め幅広い分野で活躍しており、その手腕は高い評価を得ている。

東京音楽大学非常勤講師（吹奏楽）、元 洗足学園音楽大学非常勤講師（オーケストラ／吹奏楽）、ミュージックスクール「ダ・カーポ」講師（指揮法）、横浜ブラスオルケスター音楽監督、ソノリテ甲府吹奏楽団音楽監督、That's Saxophone Philharmony 音楽監督、関西学院大学応援団吹奏楽部 音楽監督

洗足学園ファンファーレオルケスト

Concert Master	伊吹 梓		
Soprano Saxphone	今川 萌	角谷 澪	清水 建吾
	加藤 恵莉菜	山崎 遼介	
Alto Saxphone	黒澤 望愛	本間 美桜	寺東 春美
	阿部 未来	石田 真彩	八木 寛菜
Tenor Saxphone	辻 水紀	川口 華菜	水野 加奈子
	下藤 香花	中原 雄太郎	
Baritone Saxphone	岡本 彩花	山中 杏実	酒井 優希
	大澤 茉依	鈴木 ましろ	
E♭ Cornet	植田 優花	加藤 早弥乃	谷口 諒
	池谷 彰恩	冨永 倫	
Flugel Horn	伊吹 梓	芦川 大樹	丸岡 三希子
	草野 あんず	江原 春香	鈴木 みのり
	錦古里 愛	樋口 萌々花	渡辺 寛子
	竹内 大輝		
Trumpet	石垣 静流	垣本 真夢	宇津木 清来
	佐々木 右京	濱田 ほむら	藤田 雄大
	堀江 風雅	鹿野 円香	神山 柾紀

French Horn	小秋元 歩	後藤 陸歩	末永 廉
	淺田 万結	西川 宗辰	半﨑 愛理
	梶田 茉朋	山本 海音	
Trombone	出田 希乃	長坪 海斗	永吉 彩花
	平野 結梨香	三浦 健	裏木 りりあ
	佐藤 頼星	サイエン ジエン	伴 芽衣菜
Baritone	加藤 千聖	佐々野 広雅	清水 榛菜
Euphonium	谷田 果奈美	市村 結衣	大島 成実
E♭ bass	鈴木 湧太	渡部 陽菜	遠藤 愛奈
B♭ bass	岡田 侑也	髙島 佳樹	長谷川 夏帆
	澤田 翔也		
Percussion	小栗栖 未久	北野 佑芽	馬島 啓
	松井 菜々子	大塚 愛美	田代 万莉子
	栃下 紗奈	中嶋 遼	林 英希
	福本 奏音	前田 歩都	前田 伶弥
	加藤 海夏太	阿南 杏佳	小川 友李江
	熊谷 彩夏	柴田 貴丸	山野 智広
	YANG YIDA	渡辺 優生	椎名 萌
Banda	居石 まどか	森 猛流	磯野 沙弥香
(学生賛助)	檜山 沙南	稲田 菜摘	宮澤 恵美

企画運営責任者	露木 薫						
副責任者	岩本 伸一	滝澤 尚哉					
指導教員	松元 宏康	成田 徹	貝沼 拓実	上田 仁	神代 修	古田 賢司	本間 千也
	五十畑 勉	久永 重明	池上 亘	菅 貴登	府川 雪野	山口 隼士	新井 秀昇
	齊藤 充	岩黒 彩乃	次田 心平	渡邉 功	中村 祐子	野本 洋介	
授業助手	北野原 由依						